

## ★システム産業で迎える一九七〇年代

★わたしの意見

# 神戸の街づくりに企業も積極参加を

四 本 潔

△川崎重工業KK社長▽



ここ数年、盛んにシステム化ということが論議されているが、それは具体的には海洋開発、公害防止、輸送革新、コールドチェーンなどに顕著にあらわれ、最終製品を売るというよりむしろシステムを売るわけである。だから他種事業を多く持っている企業が有利であることはいうまでもない。

川崎重工業は昨年四月に、造船、車両、機械の分野が合併、新規に川崎重工業としてスタートを切ったが、今年度は、システム産業のメリットを大いに生かして、海洋開発、海洋調査船、ロボット工学などの目標に、いろいろの事業を横系列にして進んで行きたい。

### ★神戸は広域経済都市における窓口としての発展を、

東京に移って七年ぐらいの私だが、新幹線、飛行機、高速道路と交通革命の今日、東京からの神戸というほど距離感は持っていない。湊山小学校を三年まで、垂水村の小学校を出て神戸二中と、幼年時代および青年時代を神戸でおくただけに、東京在住の身になっても、言葉だけはいっこうに江戸っ子になりきれない。東京はすでに、神戸から見る東京でなく、世界における東京という位置づけができるだけに、東京と神戸を比較するのはむずかしいけれど、ただ私の実感としていえることは、将来、仕事の面において第一線から退き、東京にいる必要性がなくなれば、すぐさま生まれ故郷の神戸か、神戸周辺に住みたいものだと思っている。

神戸は天然の地形上、工業都市の中心地、いわゆる生産都市にはなり得ないだろうが、とすれば神戸の生きる道は、今後の広域経済都市の中で、貿易を、それにともなう流通機構を外国に対する日本最大の窓口として発展することであろう。伝統ある港の利点を、交通革命および流通革命の中でフルに生かして、関西の代表選手としての活躍が期待される。そのためには、ポートアイランド明石架橋などに関して、企業の側も市民として積極的に推進する姿勢が望まれる。

世界の旅を  
企画します



A HAPPY NEW YEAR

本社 神港通運株式会社

### 三隨題想



エメリッヒ市長と筆者

ヨーロッパ  
川瀬 喜代子  
コーヒー飲み歩き  
△西村コーヒー店主▽

昨年九月、「クロバート」といって、焙煎機を新しく買入れる目的もあって、ヨーロッパのコーヒー業界をあちらこちら見て参りました。ことにドイツは、ヨーロッパで第一位、世界でも第二位のコーヒー消費量を持っているだけに、焙煎機の発達もひときわ進んでいて、"チボー"という工場などは、日本の百貨店位の規模で、完全な大量生産オートシステム。大

量のコーヒー豆が、すごい速さで次々と焙煎されてゆく様子は、なかなか壯観な眺めでした。街の小売店ではコーヒー豆のままパックして売っていて、お客さんが各々勝手にひいて帰ります。また日本のお茶がわりとでもいうのでしょうか、カフェインぬきのコーヒーが相当出来まわっていたのもなるほどと思われました。何しろ、日本ならば、番茶、煎茶、抹茶、紅茶、コーヒー……とバラエティに富んでいますが、向うは飲むといえばコーヒーがほとんどなものですから。それだけに、より速い焙煎をとすることが第一で、きめの細かい味づくりをしていては消費量に追いつかないというのが現状のようです。

コーヒーを飲みながら、道行く人を眺めるのも楽しいもの。とにかくコーヒー一杯で何時間ねばついても文句ひとついわれることは無いのです。

コーヒーのハシゴでもう一つ気付いたことは、ウェイターまたはウェイタレスのプロ意識の高さとサービスの質の日本との違いです。ほとんどのお店では、ウェイター（ウェイタレス）は各自持ち場をもっていて、自分の持ち場にどれだけお客様を確保するかということが直接自分の収入に結びつくのです。たいてい固定給は少く、チップと歩合制によって収入を得るようでした。みんな、自分の仕事を誇りを持ってやっていて、おしつけがましさのない、気持のゆ

き届いたサービスをしてくれるのです。日本では、喫茶店に入るとすぐオシボリ、お冷、マッチをもってきて、それがサービスだといわんばかりですが、そういう種類のサービスは一切ありません。

過剰サービスと真のサービスとの違いは、充分見習つていいと思うのです。

ワインナコーヒー発祥の地ワインの“ディーメル”という喫茶店はすてきでした。コーヒーの中にフレッシュなクリームが浮いて

とけるような味合い……。百年も前から続いているお店で、調度類は

歴史をこめてアメ色に光り、今にも、宮中から馬車に乗って、裳裾をひいた貴婦人が現われてきそう。そんなクラシックな雰囲気にひとりきってコーヒーを飲みながら、今度は私のお店をこんなにしたら、またあのようなやり方はどうだろう。そんなことを思いめぐらすのは、ほんとうに楽しいものでした。



## 福富章子 ビジネス界への一考 ファッショニ

△明石短大講師▽

ビジネス界への一考  
ファッショニ  
ビジネス界への一考  
福富章子  
△明石短大講師▽

ファッショニ・マーチャンダイジングという言葉が、昨今脚光を浴びてきた。ファッショニ・マーチャンダイジング・ビジネスとは女性はもとより男性、子供すべての衣服およびその附属品をデザインし、生産販売する企業すなわち素材から製品となつて消費者の手に渡るまでの過程におけるあらゆる種類の企業の集りをいう。言葉は新しいが、日本の特に第一次製品部門における繊維産業の歴史は古い。最近の合繊維界のめざましい展開、既製服の品質向上、大衆

消費者のファッショニ意識の高まりなどによって再認識され、新しい段階へと飛躍しようとしている

業界といえよう。ことに合繊の生産量はアメリカに次いで世界第二位といわれ、その低コストの有利さからもU.S.業者達をおびやかしている。

アメリカのファッショニ産業は

鉄鋼、窯業や機械、車などの高度生産材、消費材に次いで第七位を占め、ニューヨークでは第一位の規模を持つ。全国生産量の3/4近くの婦人服<sup>23</sup>の子供服、1/2以上のスポートウェアはニューヨークの業者によつて生産されている。その他、ファウンデーション、ランジエリー、トリミング材、ハンドバッグ、ジユエリーなどのアクセサリー類業者も殆んどがこの都市に集中している。常に新しい情報入手を必要とし、タイミングが大きく成功を左右するファッショニ界にあっては、消費者の動向に常に接していく中心地にオフィスを持つことは必須というわけである。

マンハッタン島を南北に走る七番街の三十四ストリートから、タイムズスクエアのある四十二ストリートまでの両側、うす汚れた古い高層ビルのそびえる一画がいわゆる「セヴンス・アヴェニュー」で代表されるガーメントセンター

である。

衣料や反物を山積みのトラックが激しく行きかい、その間をくぐつて数十着の既製服や毛皮のコートをむきだしのままハンガーにかけたラックを、ゴロゴロと押し運ぶ人々。気ぜわしくビルに出入りするショールーム・セールスマントバイヤー、モデル達。建ち並ぶビルの中には約五百にもおよぶ会社がひしめき合つてゐる。その殆んどは零細企業であり、毎年多くが倒産し、新しい企業が誕生する。一万平方フィートに対しても年間三万ドルという高いレンタルを払い、いわばかけ金の高いバクチをうちながら毎シーズンを勝負し、生き残ろうとあがいでいる人々——それが一見華やかなファッショニビジネスにたずさわる業者の姿ともいえよう。

今新しいステップを踏み出しつある日本のファッショニビジネス界に待ち受けるものそれはニューヨークと同じ厳しい競争の現実であろう。それに対処する方法の一つ——それは新しい人材の養成ではないだろうか。アメリカにはファッショニ・マーチャンダイジングコースが設けられた大学や専門学校があり、卒業後、既製服メーカー、テキスタイル関係、ファッショニ小売店、広告、出版関係その他あらゆる方面に進む人々を

養成する。この種の教育は今後日本本の業界が必要とし、大いに考えてゆきたい課題である。

## 精神文化を 神戸の街に

三木 康弘



△神戸新聞学芸部次長▽

山を削って、埋め立て地を造成する。大型開発も必要とは思うが神戸市政の重点が、あまりに産業本位というか、物質本位なのは息づまるほどだ。

こないだ神戸の若い建築士の方々に座談会をやってもらったときだ。神戸の公害で最大の難題は、騒音防止だ、という話を聞き、なるほどと思った。細長い神戸の街を、

『冷えびえとしたインゴットのとき』一と、神戸市や兵庫県の文化行政を形容したのは、俳優の阿木五郎さんだ。阿木さんに限らず芸術家たちのお話を聞けば聞くほど、同感しないでいる。

私事にわたくし恐縮だが、小生の家の前の車道が舗装されたのは三、四年前のこと。その両側に歩道『予定地』の細長い地面が残されている。これが、いまだに剝き出しの地面で、ベンベン草が生えたり、石ころが露出したり、非常に歩きにくい。

大きな団体の市バスやトラックが通るたび、人々は、この不安定で、歩きにくい地面へ退避しなければならない。押しやられ、追つられる被害者心理に襲われる。

『人間なんかどうでもええ』といわれているみたいだ。

は、その土曜劇場を、ふるえ上がるようにならな葺合公会堂で上演している。

何も芸術の送り手たちだけの問題ではない。享受者である私たちとは、安いホールであり、美術館であり、プロムナードであり、集会所であり、広場である。児童公園である。

七〇年代には『繁榮の中身』が問われるといわれる。神戸の繁榮の中身も問うてもらいたい。

昨年八月から、私たちの神戸新聞は『郷土作家競作シリーズ』といつて、地元の作家に、次々連載小説を書いていただいている。もう十一人目になった。まだまだ続くはずだ。

先日開かれた全国→地方紙の学芸部長会議で、このシリーズが話題になったとき『うちではとてもできない、続かない』と、他紙の連中がうらやましがっていた。

神戸、兵庫県は『書き手』が、それほど、全国でもまれなほど、多いのである。何と心強いことだろう。『冷えびえとし』『不毛な』のは、行政では、ということになれば、人間都市を唱える新しい市長さんは心外だろう。精神文化の方面に関心の深い新市長だけに、かける期待は大きい。

昨年結成された兵庫県劇団協議会

★ある集い★その足あと★



## K R & A C

### ラグビーチーム

K R & A C (Kobe Regatta & Athletic Club) は、今年で約百

年を迎える、日本で最も古い外人スポーツクラブである。神戸近辺に在住する外国人（イギリス、ニュージーランド、オーストラリア、アメリカ、カナダ、スイス、日本……etc）が集まって、スポーツを通じての親睦クラブをつくるうではないかということで設立された。約百年の歴史といえば、慶應三年（一八六八年）、神戸港開港以来の神戸在住の外人の歴史を辿ってきたといつても良い。

文字通り最初は、ボート（Regatta）などが主体であったが、現在は、ゴルフ、ボーリング、バドミントン、テニス、

ベースボール、ソフトボール、サッカー、ラグビー等々のチームが結成されている。

◇

このラグビーチームが結成されたのは約五〇年前。日本に始めてラグビーが紹介されたのは明治二年、日本ラグビー・フットボール協会の設立が大正十四年だからかなり歴史は古い。

最初の内はまだ弱小であったので、自分達チームの間や昔の中学校のチームと試合を行っていた。ともかく勝負は二の次、ラグビーを楽しむことが目的である。

その後、戦争でチームも解散を余儀なくされたが、一九四九年、戦争が終るとすぐ、R・ピアソン氏、P・バンドルフ氏の二氏が再びチームを編成した。当時、道具といえば、ラグビーボールぐらいいで、勿論、ロッカールーム等の設備などは一切なく、グラウンドも駐留軍に占領されていたため、西宮やら近辺のグラウンドを借りて試合をしにいった。それでも、ビアンソン氏などは裸足で、グラウンドを走りまわって練習を続けたものだった。

この頃からだんだん腕を上げて高校、川崎製鉄、神戸製鉄ついで京都大学、関西学院大学のチームと一緒に試合を持つまでになった。

一九五〇年、同じ在日外人クラブである横浜の“インポート”チームと、最初の試合を行なった。以来一九六一年まで年に一回の交歓試合を続けてきた。

現在は設備も充分そろい、週に二回、皆仕事を終えて七時頃からユニホームに着替えて練習に余念がない。各々、自分の会社をもつてているものや、会社員、教師など多忙な職業の持主で、週二回の練習に、週一回（土曜か日曜）の試合というスケジュールは大変きつと思えるのだが、それがまたかえって楽しみなのだという。

練習の成果も上って、近頃は、自衛隊や慶應大学O・B、大阪ラグビーチーム、神戸ラグビーチームなどの強力チームと対抗試合を持つようになってきた。このチームは、約 $\frac{3}{4}$ が既婚者で年令的にも二〇～四〇代と巾が広く、一般ラグビーチームと比べると、平均年令はかなり高いのだが、ギャップをのり越えるバイタリティがある。ダイナミックで男性的なゲームであるラグビーは、それだけに危険防止の上から特に、フェアプレーと協力によるチームプレーが必要とされるのだが、七カ国以上の人々からなるこのチームの呼吸はぴったりと合っていて気持が良い。

△グラビヤ七頁参照

Imported Drugs & Proprietaries - Household & Kitchen Needs - Cosmetics &

Magazines - Toys - General Sundries-Dog & Cat Needs

Toiletries - Baby Needs Greeting Cards



Wrapping Papers - Stationeries - Accessories - Candies & Foods - Books &

# AMERICAN PHARMACY

—アメリカン・ファーマシー—

神戸市生田区下山手通3丁目36



STORE HOURS : 9.00 - 7.00(Reg.) 11.00 - 6.00(Holiday)



KOBE : TOR ROAD, IKUTA-KU TEL(39)1384-5224 (33)1352

TOKYO : NIKKATSU BLD., CHIYODA-KU TEL(271)4034



パーティのあなたに  
クインの輝きをそえる  
ミンクのストール!!



- ★ホモ サファイア ミンク ストール
- ★ホモ パステル ミンク ストール
- ★ヴァイオレット ミンク ストール

ペロ毛皮店

神戸国際会館 1階

TEL (078) 22-3327

'70  
A  
HAPPY  
NEW  
YEAR



マキシンの帽子のおもとめは  
全国有名百貨店でどうぞ！

婦人帽子  
**マキシン**  
神戸・トアロード 東京・銀座3-2  
TEL(078)33-6711~3 TEL(03) 535-5041

# 三宮 哀愁

林田 重五郎（随筆家・写真も）



カスバの気安さが残っている三宮の小路

カスバ——迷路、そこに姿を消せば外界から断絶する気安さ。なんとなく親しみやすい建物と小路の連続。

戦後間もないころ、われわれが神戸のカスバと呼んでいたのは阪急三宮駅の北側、生田筋の東側、生田新道の南側、この三角地帯であった。ななめに走っている露路、ペリカンなどと昔なつかしい名をつけたバー。ロシア料理店、あるいはユーラシアがアルバイトで働いているカフェ。この間まで中学の先生であったという三人一組の流し。ラ・クンパルシータを頼むと、実にうまく上品に演奏してくれた。

このカスバ地帯は生田新道を越えて北に拡がった。そして現在はナイトクラブやキャバレーの大きなのが出現し、道路が広くなったりして、カスバ気分が薄れたものの、やはり心地のよい場所であるのは変りはない。

◇

昔は国鉄以北のこの辺は暗かった。酒の中心も、以南の三宮神社周辺にあって、南が陽なら北は陰であった。ちょうど、大阪の、大阪駅以北が

そうであつたように。大阪はこのごろ急に以北が開けたが、三宮の方は三十年昔の、昭和十一年四月一日の阪急三宮乗入れ完成で文明時代が来たのである。今までバーセンターの中心は以北、商店街の中心が以南になつてゐるといつてよいほどである。昭和八年ごろ、暗い時代の生田前で下宿したことがある。生来のウドン好きで、便利がよいと考へて、ウドン屋の二階を借りたのであるが、四六年中湯気が階下から昇つて来る。湯気はよいが、ダシの香が常に立ちこめる。いくらウドンが好物といつても、この香には降参して、一ヵ月ほどで



この生田筋と生田新道の角あたりが三宮のメッカである

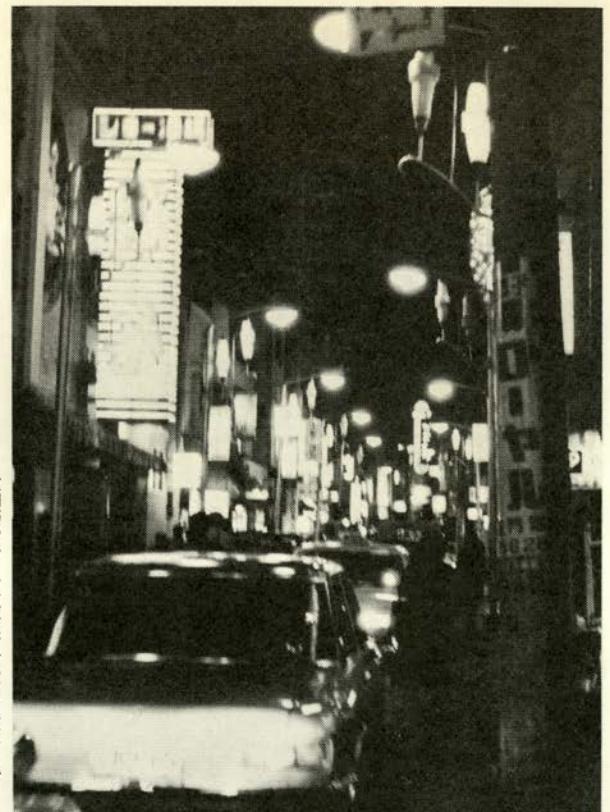
また移動したが、この店が細く長い北長狭通に面していた。この道がいつ生田新道に拡大されたのか、斜めに阪急三宮東口へ突き抜けたのか、阪急乗入れのあとかさきか、正確な年月を忘れた。錯雜していた小路の中を貫通したので、周囲がカスバ状態になつたのである。東門筋が古家具屋街で、外人が残して帰つた掘出物が特色であつたのを除いて、目立つこともなかつたところが、阪急と生田新道とで一変したのである。

もちろん戦火で焼野原になつた。だが地の利が、どこよりも復興を早くした。焼野の生田筋東側に、いち早くスーベニールショップNさんの大きな店が建つたのは昭和二十一年だつたか、翌年だつたか。その筋向いの喫茶店のMも、豪華さに目を見開かせた。焼跡ではなおカッポウ着姿の怪しげな男性などが出没はしていたものの……。

◇

この号はお正月である。祝意をこめて、文字通り、戦後の三宮の中心を作つて來た、昇り竜のような女性の登場を願おう。

大柄なその姿が神戸に現われたのは昭和十年ころである。三宮神社東方の小路の中に、元町の有名店の令嬢が開いていたバーがあつたが、そこへ勤め始めたのである。大阪の名門の出身とのウワサだつた。間もなくそのやや西方に、自分で喫茶店とバーの合の子のような店を開いた。名がいまもそのままのMである。女学生のような娘さんを見込んだのである。バー形式は困難になるところが事実である。バー形式は困難になるところが事実である。高架下にスタンドを作つ



東門筋のバーの看板は何百枚あるだろうか

のしゃれた店が焼跡の中に、人の心を引きつけた。昭和二十四年、こんどは独立のMを生田筋と新道の角の近くに造った。赤レンガを積んだスタンドの色がすばらしかった。並べてある酒の種類がすごかった。

大仏次郎さんに「宗方姉妹」という新聞小説の秀作があるが、大仏さんも、その当時のMの気分に好意を持たれたのであろう。この小説の二カ所に店の名が出てる。最後のクライマックスがこの店である。このころから神戸の名士たちが続々客に加わった。店が良ければ、よい客が増す。よい客が殖えれば、店の空気も、ホステスもいよいよ一流になって、さらによい客が来る。

大阪、東京、六甲山上と支店が出来る。しかもマダムの気風は昔ながらのところがあつて、数年前のことだが、約十人で限られた金を持って訪れたことがある。「ビールだけなら十分だわ。」そういって貧乏な非社用族を気持よく飲ませてくれたものである。そして「これからも遠慮をせずにいらっしゃいよ。」と笑った。

た。阪急三宮の西口を少し西へ歩いたところにあった公衆便所の横である。三宮飲食街の北方移動の先兵になつたわけだが、スタンドのやり方が変わっていた。生ビールだけ、ジョッキが赤、黄、緑と三色に色別けされて、一杯目はこの色、二杯目はあの色と決っているから、いま何杯目を飲んでいるのか直ぐわかる。夕方にはビール党が三色のジョッキに殺到した。わたしはマダムの頭の良さに敬服したものである。戦争が深刻になつて、ビールスタンドさえ閉じねばならなくなつた。ときどき電車でモンペ姿を見かけたが、おそらく最も苦しい時代であつただろう。

戦火、終戦。やがて生田神社東門筋を少しついたところに、共同経営のMを開店。コテッジ風

# 神戸の 体臭

楠本憲吉  
え・津・高・和・一

大阪の女子大で教鞭をとっている私は、一週間のうち、水曜と木曜の二日間は大阪へ飛ぶ。

今年はそういう生活が続いた関係上、神戸へもよく訪れる機会に恵まれた。

神戸はたしかに変貌した。しかし、東京や大阪の変身ぶりに較べると、まだ変貌の域を出ず、せいぜい整形手術程度で、中身まで変ってしまったわけではない。

街には街の表情があると同時に体臭もある。

神戸という街の体臭は少しも変っていないと私は思う。

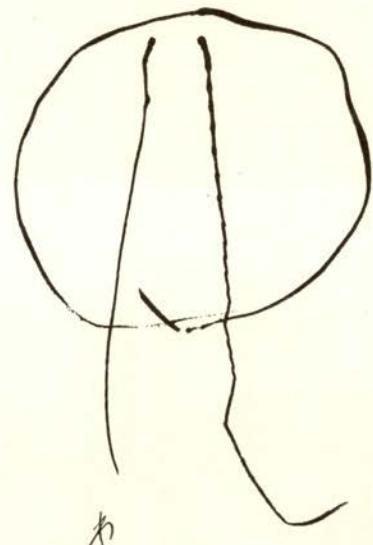
三の宮界隈にしても、トアロードにしても、元町にしても、新開地にしても、私の少年時代、青

年時代を通じて少しもその体臭を変えていない。

神戸の体臭はバター臭いのが特徴で、それもヨーロッパ並みの優雅なバター臭さである。

三の宮でよく飲むが、生田筋に、私の遠戚がパンの製造を手広くやっており、そのベーカリーの主人公と私が、俗にいうウマがあうので、神戸へ行くと例外なしにその店を訪ねることにしているからである。

二人とも飲み手であるから、たいていその主人公の奢りで二、三軒はハシゴをする。そして仕上げは必ず「スライス」にきまっている。「スライス」は本当に洋酒を楽しむ店で、あの手の店は東京にも横浜にも見当らない。私はこの店でアーサ



1、キャンドラーやブキヤナンズの世にもリッチな酒の味を教えた。先日も大阪ミナミのバー「ラブレース」のママと話したのだが、彼女も若き日（今も若いが）、三の宮から加納町にかけてよく飲み歩き、このスタイルでとどめを刺した体验を纏々ときかされ、嬉しくなったのであった。

有難いことに、神戸には私の女友達が沢山いる。

まず、デリカテッセンのご主人の高橋明場さん。このひとのバイタリティとメンタリティは驚くほど豊かでいつ逢っても感服するばかり。

次いで北野クラブ社長の浅木トミコさん。おつきあいは浅いけれど、心の豊かなひとで、しみじみとお互いの心を通わすに足るひとだと思う。

秋とはいえ、残暑のきびしいある日の午後、岡山へ行くべく三の宮駅へ出向いたが、こちらの希望する特急も急行も満席で、夕方まで指定席がとれない。仕方なくデカいカバンをさげてトアロードを歩いていたら、乗用車がすいーっととまり、浅木さんが降りてこられ、「どちらへ」

といわれた。実はこれこれしかじかで、時間が突然あいてしまったので、どこかで時間をつぶし、できれば原稿を書こうと思って、行き先を案じていたところですというと、それならばクラブへどうぞと快く引き受け下さり、冷房の効いた三階の会議室を一室夕方まで貸してくださったのであった。

仕事が一段落ついて下へおりてゆくと、

「お疲れさま」

といって、おしばりと水割りを出して下さったが、眼下にひろがる神戸の街、港を俯瞰しながら

飲んだ水割りのうまかったこと。この厚誼は当分忘れないものと思っている。

若い友人では、宝塚星組の篠美樹さん。このひとは私の友人で、新開地でオリエンタルという楽器店を経営している中島響比古氏の長女だが、いつも父上を通り越して、年少の友人としておつきあい願っている次第である。

その他、BGのひとやホステスや女子学生さんや多勢いてくださるが、この現象は私の本拠地東京では見られぬ現象であって、神戸ならではと全くありがたいことだと思っているのである。

実は、この原稿を書く前に、学研の「保育のえ」という雑誌から原稿依頼の電話がかかってきた。目下、年内にどうしても片づけねばならぬ大きな仕事をかかえており、いかなる仕事が入ってきても断ろうと決心したばかりのところである。電話の主は若い女性の編集者で、しかも神戸なりのしゃべり方である。

「キミは神戸でしょう。」

というと、

「アラ、よくお分りになりましたこと。青木で生まれ、神戸で育ち、関学を出たんです。」

と、その人は明るい屈託のない声で一気にそういった。

私はその人が神戸メツチエンであるがゆえに、とうとう新しい原稿を引き受けてしまったのであった。

神戸の街の持つ体臭は、私にとって、女性の体臭のように、芳醇で、優雅で、そして母のように安堵に満ちたものであるといつてもいい過ぎではない。

△俳人

# 淀川さんの ラブレター集

## 「淀長映画館」



大正末期の新聞地第一朝日会館



不死鳥の喜劇王チャップリン



淀川長治氏



テレビ日曜映画劇場の名解説者で映画評論家の淀川長治氏が、週刊朝日に連載した「淀長映画館」をまとめて朝日新聞社から発刊された。

巻頭にててくるのが大正末期の神戸第一朝日会館の写真。チャップリン、バレンティーノ、クーパー、グロリア・スワンソンなどの懐しいスチール、名シーンがくり込まれた、楽しい、楽しい活動写真の生きたお話。

「これは私の映画のラブ・レター集でございます」と映画に情熱をかたむけたむけきった淀川氏のエスプリが集められている。そして兵庫柳原で生まれ、神戸三中を終えて、

その間に新聞地が、少年を映画人生にみみ込ませる土壤となつた。神戸三中時代のエピソードを抜粋すると、コレが悪いのであります。ついに教員室に呼び出され、そこで、それでは先生たちよ、今週のベル・ベネット

トというアメリカ俳優の「ステラ・ダラス」（一九二六年作）というのを一度見てから叱つてもらいたいもんだと、すでにそのとき十七歳中学三年級長の私はセンセの前でひらきなおつた。

先生がたは本当に見に行かれた。そしてそのあくる朝の教員室はその映画のことでケンケンゴウゴウ。ぜんぶのセンセが、みんなびっくり 感激だったのです。そしてどう叱つても月に二本は誰もが学生帽をふところにして見に行くのだから、いっそ、学校から月一本、先生生徒そろってみるというのは、いかなものであります。……というコトバがやがて本當になつて、神戸の三中は「バクダットの盗賊」やドイツ映画「美と力への道」、そして涙の名作「ステラ・ダラス」を教師引率のもとに総見堂々の鑑賞をしたものである。そしてその映画の選択には私が当つたのであつた」とある。

八歳から映画の虫になつたが、良きも悪しきも映画を見る。その中からこれは「ええ映画やぞ」と選ぶ眼が、批評精神の結晶となつたことが伺える。△五五〇円△

# 謹賀新年



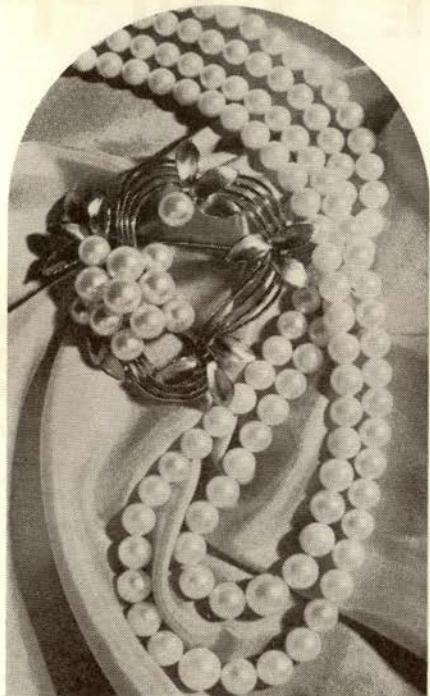
|  
27  
|

オリエンタルホテルチェーン

神戸オリエンタルホテル  
神戸・生田・京町 TEL (078) 33-8111

六甲オリエンタルホテル  
国立公園六甲山上 TEL (078) 89-0333

世界の人々に愛される北村パール



*Kitamura Pearls*



北村真珠店

元町通2丁目60 TEL 33-0072

'70

A HAPPY NEWYEAR

旧年中はご愛顧の程、まことに有難  
とうございました。本年も倍旧のお  
引立の程よろしくお願ひします



熊内・本社



北欧の銘菓

ユーハイム・コンフェクト

本社・工場 ■ 神戸市東灘区篠原町1 (市立美術館東隣) TEL 22-1164・9865  
三宮センター店 ■ 神戸三宮センター街(洋菓子・喫茶・レストラン) TEL 33-2421・4314  
生田店 ■ 神戸三宮生田筋(階上喫茶室) TEL 33-0156・7343  
さんちか店 ■ 神戸三宮地下街スイーツタウン TEL 39-3558